

## 中世における文末表現「と思ふ」と「と存ず」

渡辺 由貴

【キーワード】 思う 存ずる おぼゆ 文末思考動詞 モダリティ

### 1. はじめに

動詞「思う」は、「何か具体的な考えや感情を心にいだく」(『日本国語大辞典』第二版)ことを表すが、文末でト格をとり、発話者主体で非過去・非否定という条件で、モダリティ形式として用いる場合がある。

(1)明日は雨が降ると思う。

(2)これで終わりにしたいと思います。

文末表現「と存ずる」も「と思う」と同様に、話し手の態度を示す機能を持っている。現代では両表現の差異はあらたまり度の違い程度であるが、中世における状況はどのようなものであったか。文末思考動詞の諸相を明らかにするため、本稿では、文末表現「と思ふ」「と存ず」がともに見られる中世語資料を主な対象とし、まず話手・聞手の関係や待遇面の観点から比較し、次にト格の中身などを検討して、文末思考動詞としての用法上の相違点を考察する。それによって、中世における「と思ふ」「と存ず」を中心とした文末思考動詞の位置づけを考えたい。

文末表現「と思う」について、森山(1992)は、その機能を「個人情報の表示」とした上で、前接成分の意味的側面に着目し、＜不確実表示用法＞(前接成分が客観的な情報)、＜主観明示用法＞(前接成分が主観的な情報)があるとする。その条件として、仁田(1991)は「彼は間違っていると思う。」を、「[非過去、非否定、『思ウ』の一人称主体の省略]といった条件の元でモダリティ形式化していった例である」(p.58)とした。渡辺(2007)では、(1)のように推量表現に準ずるものとして使用される例が近代に急増したこと、中世軍記物語において、(2)のように願望や意志表現に接続する文末表現「と思う」が多く見られることを確認したが、森山(1992)のいう＜不確実表示用法＞は近代以前には定着していなかったように思われる。また、中世の軍記物語や狂言においては、＜主観明示用法＞が多く見られることから、モダリティ形式としては、＜不確実表示用法＞より＜主観明示用法＞が先に定着したのではないかと考えられる。今後さらに「と思う」以外の文末思考動詞についても検討し、「と思う」のモダリティ形式としての定着の流れを考え、文末思考動詞の通時的な全体像を描き出す必要があろう。

文末表現としての「と存ず」に焦点をあてた研究は、確認した範囲では見られなかったが、「存ず(る)」についての研究としては、辻村(1968)が、「敬語変遷一覧表」において、動詞「存ず(る)」を下位主体語とし、この語が中世前期から現代にかけて用いられていること、近世には美化語に転じた用例もあることを示している。穂田(1958,1975)は、狂言などの中世語資料を対象として「存ずる」の用法を聞手・シテの位相や人称から論じ、基本的には自卑・丁重の謙譲表現とし、莊重表現的な例についても、背景に「支配的尊者」(穂田 1975、p.3)を想定している。

本稿では、これらの知見をふまえ、「と思ふ」および「と存ず」の、文末思考動詞としての用法を考察する。

## 2. 調査方法と資料

調査にあたっては、先行研究の論に従い、冒頭に挙げた「文末でト格をとり、発話者主体で非過去・非否定」の条件に該当する用例のみを考察対象とした。ただし、敬語補助動詞・敬語助動詞や、終助詞、指定表現の後接した「と思ひ候」「と思ふぞ」「と思ふなり」等は、文末表現「と思ふ」のモダリティ形式としての条件に反しないものとみて、考察対象とする。文末表現「と存ず」についても同様に扱う。また、会話文での用例を考察の対象とし、会話文内の引用は考察対象から除外した。

また、調査した資料については、本稿末尾に【資料】として挙げた。会話文に文末表現「と思ふ」「と存ず」が見られる中世の資料として、軍記物語や説話を中心に調査した。原則として、「日本古典文学大系」を確認したが、軍記物語については、諸本によって出現状況に差がある可能性を考え、より古態をとどめている諸本や、『平家物語』の読み本系と語り本系、天草版などについても調査することとした。

## 3. 中世における文末表現「と思ふ」と「と存ず」の使用状況

中世における、文末表現「と存ず」と「と思ふ」の出現数を、話手と聞手の身分関係別に表に示す。表1では、文末表現「と存ず」「と思ふ」について、聞手の方が話手より上位として扱われる【話手<聞手】、話手の方が聞手より上位であるか、同等である【話手≧聞手】、【その他】に分けて用例数を調べた。【その他】には、聞手が複数いる場合や、恋人関係、敵対関係など、上下関係が判断しがたい用例を分類した<sup>1</sup>。

<sup>1</sup>西田(1974)は、『平家物語』における敬語を、「1. 話し手と聞き手との間に身分的な上下関係がある場合」「2. 話し手と聞き手とがほぼ対等である場合」「3. 話し手と聞き手とが親子・夫婦などの関係にある場合」「4. 会話の文における敬語の文学的的技巧」にわけて考察している。

【表 1】

|               | と存ず |     |     | と思ふ |     |     |
|---------------|-----|-----|-----|-----|-----|-----|
|               | 話<聞 | 話≥聞 | その他 | 話<聞 | 話≥聞 | その他 |
| 平家物語(覚一本)     | 4   | 0   | 0   | 0   | 4   | 9   |
| 平家物語(百二十句本)   | 3   | 0   | 2   | 0   | 8   | 3   |
| 平家物語(延慶本)     | 8   | 0   | 1   | 0   | 8   | 12  |
| 保元物語(半井本)     | 1   | 0   | 0   | 0   | 4   | 4   |
| 保元物語(金刀本系)    | 0   | 0   | 1   | 0   | 2   | 2   |
| 平治物語(陽明・学習院本) | 0   | 1   | 0   | 0   | 0   | 0   |
| 平治物語(半井本)     | 0   | 0   | 1   | 0   | 3   | 0   |
| 平治物語(金刀本系)    | 1   | 0   | 0   | 0   | 3   | 0   |
| 太平記(神宮徴古館本)   | 2   | 3   | 4   | 2   | 11  | 5   |
| 太平記(天正本)      | 10  | 1   | 14  | 0   | 11  | 4   |
| 太平記(流布本系)     | 6   | 0   | 9   | 1   | 14  | 4   |
| 曾我物語          | 4   | 0   | 2   | 0   | 3   | 3   |
| 義経記           | 2   | 0   | 0   | 0   | 1   | 1   |
| 天草版平家物語       | 9   | 0   | 3   | 0   | 13  | 1   |
| 愚管抄           | 0   | 0   | 0   | 0   | 1   | 0   |
| 宇治拾遺物語        | 0   | 0   | 0   | 1   | 5   | 5   |
| 古今著聞集         | 0   | 0   | 0   | 2   | 1   | 1   |
| 御伽草子          | 2   | 0   | 1   | 0   | 3   | 3   |
| 虎明本狂言集        | 3   | 2   | 212 | 0   | 11  | 17  |

全体の用例数は決して多いとは言えないが、文末表現「と存ず」は【話手<聞手】の例が、文末表現「と思ふ」は【話手≥聞手】の例が多く、このような使い方が基本となっているといえよう。また、文末表現「と存ず」の形で三人称の下位主体が存在している例はないため、モダリティ形式として機能しているとみられる。資料としては、軍記物語および狂言に用例が多く見られることが特徴的である。軍記物語は、諸本によって出現数に差は見られるものの、出現傾向に大きな違いは見られない。次節以降、両表現について、話手と聞手の関係に注目し、比較する。用例の後に、話手・聞手・資料名・【資料】にあげたテキストでのページ数を（ ）内に示した。

### 3.1. 上下関係による使用状況

#### 3.1.1. 文末表現「と存ず」

文末表現「と存ず」は、ほぼ【話手<聞手】の場合に使われるが、これは従来「存ず」が謙譲表現として扱われてきたことに沿うものである。特に軍記物語でその傾向が顕著である。

- (3)「誰か御わたり候」と申ければ、御前なる女房立出て、「何事ぞ」と答へければ、「江田源三にて候。大事の手負ふて、今を限りと存候。

見参に入れて賜ひ候へ」と申ければ、判官これを聞き給ひて、(略)(話手：江田源三／聞手：判官 『義経記』 p.165)

- (4)「鼠をたべ候へば、無病にして飛歩くこと、鳥にも劣るまじきと存じ候なり。(略)」(話手：虎毛の猫／聞手：僧 『御伽草子』「猫のさうし」 p.303)

一方【話手≧聞手】の場合に使用されるケースも、軍記物語においては少数ながら見られる。

- (5)二、三里か程打送り涙をなかして申けるは、「(略)、殊更仁木越後守に笑れむ事、我一人か恥と存するなり。(略)」(話手：芳賀兵衛入道禅可／聞手：嫡子伊賀守公頼 『太平記』神宮徴古館本 p.1020)

この「入道」は【話手≧聞手】で「と存ず」を使用している例が複数見られ、聞手に関わらず改まった語り方をする人物として描かれている。

以上のように、文末表現「と存ず」は、主として【話手<聞手】の場面で用いられる表現である。「候」が後接している際には、【話手<聞手】となっている例がほとんどであり、聞手に対する配慮があらわれている。「也」のみが後接した形の「と存ずる也」という表現が使われている場面では、【話手≧聞手】の例もある。このことから「存ず」の敬意的配慮には、共起する敬語助動詞・補助動詞との関連がうかがえ、動詞「存ず」という語自体というよりは、「存ず+敬語助動詞・補助動詞」という形で聞手への配慮を表しているようである。

#### 3.1.2. 文末表現「と思ふ」

文末表現「と思ふ」は、【話手≧聞手】の場面で用いられる例が多く、主従関係の「主」にあたる人物が使用している例が多く見られる。

- (6)入道殿の給ひけるは、「(略)さればわ殿原はわかければ、兎も振舞給へ、角もふるまひ給へ。入道は義朝をたのみて出むと思ふぞ。

(略)」との給ふ。八郎是を聞て、色を失て音もせず。(話手：入道殿／聞手：八郎 『保元物語』金刀(比羅宮)本 p.138)

後接する助詞・助動詞の類にも違いがあり、「と思ふ」には「なり」「ぞ」が後接した形が多い。「なり」は「と思ふ」「と存ず」ともに後接する例

がみられたが、「と存ずるぞ」の形は今回確認できなかった。一方、「と存ず」は「候」などの敬語助詞・助動詞と共に起する例が多くみられた。

(7)僧正「行て火ともして來よ。こゝに我衣はがんとしつる男の、俄に失ぬるがあやしければ、見んと思ふぞ。法師ばら、よび具して來」と、のたまひければ、(略) (話手：僧正／聞手：小法師 『宇治拾遺物語』 p.389)

(8)神のゝ給はく、「腰のしも常に火もゆるがごとし。六月に又内裏へまいらんと思ふなり」との給て、則見え給はず。(話手：神／聞手：貞崇法師 『古今著聞集』 p.81)

上記用例の地の文の中で、文末表現「と思ふ」の発話者に対し、「のたまひければ」「の給はく」といった敬語が用いられていること、発話の中に「來よ」「よび具して來」などの命令文があることなどからも、使用者の位相が相対的に高いことがうかがえる。

なお、「と思ふ」には【話手<聞手】の例も見られるが、例外的なもののみでよいと思われる。次の(9)は、呉越の戦いの故事であり、漢文訓読調であるという特徴がある。今回の調査では、軍記物語において、【話手<聞手】の対話で文末表現「と思ふ」を使用する例は故事からひいた話以外には見られなかった。漢文由来の文脈では、文末表現「と思ふ」を【話手<聞手】の場合に使うことが許容される可能性があるが、用例数が少ないため現時点では一般化はできない。

(9)越王ノ御前ニ進出テ申ケルハ、「生ヲ全クシテ命ヲ待事ハ遠クシテ難ク、死ヲ輕クシテ節ニ隨フ事ハ近クシテ安シ。君暫ク越ノ重器ヲ焼捨、太子ヲ殺ス事ヲ止メ給へ。臣雖不敏、欺吳王君王ノ死ヲ救ヒ、本國ニ歸テ再ビ大軍ヲ起シ、此恥ヲ濯ント思フ。(略) (話手：大夫種／聞手：越王 『太平記』 1 流布本 p.144)

『宇治拾遺物語』『古今著聞集』には文末表現「と存ず」が一例もなく、(10)(11)のように、文末表現「と思ふ」が身分の上下に関わらず使われていると考えられる。

(10)童の申やう、「日の出入所は見ゆ。洛陽はまだ見ず。されば日の出る所はちかし、洛陽は遠しと思ふ」と申ければ、孔子、「かしこき童なり」と、感じ給ひける。(話手：童／聞手：孔子 『宇治拾遺物語』 p.347)

(11)昔、母後の御夢に胡僧來て、「君の胎に詫せんと思ふ」と申けり。其後懷妊し給けり。(話手：胡僧／聞手：母后 『古今著聞集』 p.85)

また、(10)は『列子』に基づく話で、(9)のように、漢文由来の文脈で文末表現「と思ふ」が用いられている。さらに、話手が「童」であり、敬語意識が希薄であるように描かれている可能性もある。(11)は夢の中

の言葉であり、話手が「胡僧」(＝外国の僧)である。

文末表現「と存ず」は主に【話手<聞手】の場合に用いられ、文末表現「と思ふ」は主に【話手≧聞手】の場合に用いられている。【話手<聞手】の場合に文末表現「と思ふ」を使用する例が数例みられたが、中国の故事が出典の話や、文末表現「と存ず」がその作品内に使用されていない場合などに限定されている。

### 3.2. 上下関係が明確でない用例について

#### 3.2.1. 文末表現「と存ず」

以下に、聞手が多数いる等の理由により、「その他」に分類した例を挙げる。聞手が多数いるような公の場面では、文末表現「と存ず」が使用されている例が複数見られる。

(12)進出て申けるは、「縦守殿は退給とも、縦行は罷留りて、八郎殿の大矢をあたりてみると存候。(略)」(話手：伊賀國住人、山田小三郎 縦行／聞手：多数 『保元物語』金刀本 p.101)

(13)(略)越後守仲時モ、「此義ヲ存ズレ共、佐々木トテモ今ハ如何ナル野心カ存ズラント、憑少ク覺レバ、進退谷テ、面々ノ意見ヲ訪申サント存ズル也。(略)」トテ、五百餘騎ノ兵共、皆辻堂ノ庭ニゾ下居タル。(話手：越後守仲時／聞手：糟谷三郎、五百餘騎の兵共 『太平記』1流布本 p.310)

(13)の「越後守仲時」については、他にも多数の聞手(軍勢共)に対して「と存ず」を使用している例があった。多数の聞手がいる公の場では文末表現「と存ず」が使用されやすいこともあるが、改まった言葉遣いをするのがこの人物の特徴ともいえる。また、『太平記』(三種とも)における文末表現「と存ず」は、【話手<聞手】の場面で使われている時は「候」が後接しているが、上の例のように、【話手≧聞手】の場面で使われている時は、「候」が後接していないという傾向がある。

『天草版平家物語』の右馬の允と喜一檢校の会話では、互いに文末表現「と存ず」を用いている。物語の語り手による会話という点で、物語内の登場人物の会話とは別の次元の会話であるが、上下関係によって「と存ず」が使用されているとはいえない。目上の者への配慮というより、改まった語り方として「と存ず」が使用されているようである。右馬の允と喜一檢校の対話の形で、読者に対して語らせるという設定であるので、読者を意識した公的な表現として使用されていると考えられる。

(14)右馬. して大略平家もあそここなれども、大方聞き通いたかと存ずる.

喜. さればされば聞きも聞かせられ、語りも語りまらしたことぢ

や；(略)(話手：右馬の允／聞手：喜一検校『天草版平家物語』 p.811)

現代では「と存ず」は、ほぼ「と存じます」という、「ます」のついた形でのみ使用され、中世軍記物語においても「と存じ候」「と存ずる也」のように、敬語助動詞・補助動詞や「なり」が後接する形が多数であるが、『天草版平家物語』や『虎明本狂言集』における文末表現「と存ず」に、「候」が後接する例は見られず、この点は特徴的である。

### 3.2.2. 文末表現「と思ふ」

次の例は、聞手が多数いる例である。

(15) 三位中將守護の武士にの給ひけるは、「(略)。いま一度對面して、後生の事を申をかばやとおもふなり」(話手：三位中將／聞手：武士ども 『平家物語』下 覚一本 p.373)

(12)(13)では聞手が多数いる場面で、文末表現「と存ず」が使用されている例をみたが、上に示したように、同じような場面で文末表現「と思ふ」も使用されている。文末表現「と存ず」は、【話手≥聞手】という、文末表現「と存ず」が使用されにくい場合でも、一対多という場面の要因によってその使用が見られた。しかし、この例のように、文末表現「と思ふ」が聞手多数の場合に使用されている時、その話手は、その場にいる人物の中で身分が高い人物であることが多く、一対一の対話であっても、一対多という場面であっても、文末表現「と思ふ」は【話手<聞手】の場合には使用されにくいようである。

また、母娘関係や恋人関係の場合は、身分の上下という観点では判断できず、【その他】に分類した。このような親疎の「親」にあたる関係内では、文末表現「と思ふ」を使用する傾向がある。文末表現「と存ず」は子と母、男兄弟といった関係では息子や弟からの発話に見られたが、母娘や恋人同士、女性同士の発話では、その使用を確認できなかった。

(16)「(略)たゞひとへに前世の宿執にひかれて、たがひに善知識になりたまひぬと、あまりにたつとく、あわれにおぼえて、われらまでも、一蓮の縁をむすばばやと思ひ候也。(略)」(話手：曾我兄弟の母／聞手：虎 『曾我物語』 p.418)

(17)は、話手と聞手が夫婦関係にある例である。后より帝の方が上位とも考えられるが、ここで文末表現「と思ふ」が使用されているのは、身分の上下関係によるという可能性のほか、親疎の「親」にあたる関係であるためであるとも考えられる。

(17)みかど御驚きありて、今はかなはじとやおぼしめしけん、后に向ひ、仰せありけるは、「(略)御誕生まではこれに候(う)て、見參らせ候はんと思ひ候へども、なかへ―それともいかにと思ひ候。御なご

り惜しく候へども」（話手：みかど／聞手：后 『御伽草子』「熊野の御本地のさうし」 p.419）

### 3.3. 『虎明本狂言集』の「と存ず」について

『虎明本狂言集』には、極めて多くの「と存ず」による文末表現（出現形は「と存ずる」）が用いられているが、他の資料とは質を異にし、次のように、特に物語内での聞手を想定していない名乗りや自己紹介の場面での「と存ず」の使用例が非常に多い。

(18) まかり出たる者は、はりまの国のお百姓でござる、毎年御年貢に、みげうしよをもつて参る、いそひであげうと存る、（話手：播磨の国の百姓 「かくすい」）

特定の誰かにむかって話しかけているのではなく、話手となる登場人物がその段で初めて登場し、自己紹介と、これから何をするつもりかを、いわばナレーション代わりに述べる話型である。『虎明本狂言集』において文末表現「と存ず」はほとんどがこのような話型で用いられており、大名・男・百姓など様々な登場人物に同じように用いられ、使用者の位相等には無関係である。物語の内部での会話というよりは、(14)同様、観客を意識しての改まった言葉遣いであるとみられる。同資料における「と思ふ」にはこのような話型での使用は一例もない。

これは、次のような独語的心話の用例からもうかがえる。

(19) (他国の者も年貢に「初雁」を供出する予定であることを知って)  
やれーにがーしい事で御ざる、それがしが鷹がはやいとぞんじ  
たれは、あれも鷹をもつてまいる、さりながら、たばかつて、某が  
さきへあげうと存る（話手：和泉の国の百姓 「鷹かりかね」）

心話であるから、本来は表現としての配慮は不要であるはずだが、観客を意識してか「と存ず」を用いている。また、会話の例では、下記のように出会ったばかりで、相手の身分のわからない者の発話でみられた。

(20) 誠にかりそめに言葉をかけてござ有に、御同心あつて満足致た、  
是と申もかりそめながらたしやうのゑんかと存るよ（話手：太郎冠者 聞手：新座の者 「鼻取ずまふ」）

このように、『虎明本狂言集』においては、文末表現「と存ず」は、穂田(1975)の言う場面上の特定の「支配的尊者」を意識した謙譲表現としてというほどではなく、公的で、ある程度の遠慮を必要とする場合に用いられる文末思考動詞といえる。

なお、ロドリゲス『日本大文典』では、「ZONZVRV(存ずる)」の項で、「○知る、考へる、思ふといふ意味であつて、尊敬せられる人と話す場合に使われる。若者や身分の低い者と話すのに Zonjenuca?(存ぜぬか)



といふのはよくない。Xiranuca?(知らぬか)などといふべきである」と述べられているが、これは当時から謙譲表現というより、単なる改まり語として用いられつつあったことをうかがわせるものである。

先の『天草版平家物語』の例もあわせて、中世の口頭語を反映するとされる資料においては、「と存ず」は、敬語助動詞・補助動詞を伴わず、改まった、公的な性格を持つ思考動詞として用いられる傾向が得られた。

以上のように、中世語資料における「と存ず」は、「候」などを伴って上位者に対する敬語表現として用いられ、また敬語助動詞・補助動詞を伴わない場合には改まりの性格を持ち、公的な場面でも用いることができる文末思考動詞である。一方「と思ふ」は、使用者が場の上位者であるか、ある程度親密で私的な関係で用いられる表現であった。

なお、今回の調査では「と思ふ」については軍記物語で女性の使用が見られたのに対し、女性が「と存ず」を使用している例は『虎明本狂言集』以外には見られなかった。ただし女性の発話自体が少ないため、男女差についてはさらに用例を収集し検討する必要がある。

#### 4. 中世における文末表現「と存ず」と「と思ふ」の用法上の相違

ここまで、文末表現「と存ず」と「と思ふ」について、敬語や位相に関する側面から、話手・聞手の傾向を明らかにした。「存ず」は一般的に、「思ふ」の敬語体である、という説明がよくなされ、そのような面は上に述べた点や、ロドリゲスの記述からも認められる。ただし位相上の問題のほかに違いがないかと言えば決してそうではなく、文末思考動詞によるモダリティ表現としての用法上にも相違がみられる。

ここでは「と存ず」と「と思ふ」および同様にモダリティ表現の一翼を担っているとみられる「とおぼゆ」の前接成分を調査し、話者自身の心のあり方を示す「意志・願望」(仁田 1991 の「表出」と、客観的な情報を述べる「その他」とにわけ、その出現傾向の違いに注目した<sup>2</sup>。

意志・願望表現が前接するものとは、「～せむと思ふ」「～ばやと思ふ」の類で、森山の「主観明示用法」に近く、その他とは、「～だと思ふ」「～すると思ふ」の類で、本動詞の意味を強く残したものや、推量表現のように用いられ、森山の「不確実表示用法」に近いものがある。ただし森山の分類は、意味・機能的な観点で分類されたものであり、明確な判定は難しいため、本稿では形態面を重視して前接成分から分類した。

---

<sup>2</sup> 表 2 においては、『平家物語』『保元物語』『平治物語』『太平記』は「日本古典文学大系」の本文のみを対象とした。

表2を見ると、思考動詞によるモダリティ形式には次のような住み分けがみられることがわかる。「と思ふ」は前接成分が意志・願望に偏っている。一方で「とおぼゆ」は「と思ふ」とは逆の偏りを見せ、意志・願望表現をとるような例は見られなかった。

(21)「(略) 推量スルニ、城ノ後ノ山金峯山ニハ峻ヲ憑デ、敵サマデ勢ヲ置タル事アラジト覺ルゾ。(略)」(『太平記』巻七吉野城軍事)

(22)「鐘の聲の聞ゆるは、渚の近きと覺ゆるぞ。誰かある。船に乗りて行きて見よ」(『義經記』義經都落の事)

また、出現する資料に偏りがあり、例えば「と思ふ」が比較的多く用いられる『天草版平家物語』に「とおぼゆ」が全く用いられていない。「とおぼゆ」が多く用いられる軍記物語では、「と思ふ」の前接成分は意志・願望に偏っており、二つの表現で住み分けがみられる。

「と存ず」については「意志・願望」「その他」両方の用例が見られ、同一資料においても併用されていることがわかる。「と存ず」は、中世において「と思ふ」が表す面と、「とおぼゆ」が表す面の両方を担っていたと考えられ、単なる「と思ふ」の敬語体ではないと思われる。一方で「と思ふ」は、近代以降推量表現へと拡大するが、中世においては「意志・願望」に偏り、主観の明示が主であることがうかがえる。

【表2】

|         | と存ず   |     | と思ふ   |     | とおぼゆ  |     |
|---------|-------|-----|-------|-----|-------|-----|
|         | 意志・願望 | その他 | 意志・願望 | その他 | 意志・願望 | その他 |
| 平家物語    | 3     | 1   | 13    | 0   | 0     | 22  |
| 保元物語    | 1     | 0   | 4     | 0   | 0     | 7   |
| 平治物語    | 1     | 0   | 3     | 0   | 0     | 3   |
| 太平記     | 6     | 9   | 18    | 1   | 0     | 68  |
| 曾我物語    | 2     | 4   | 6     | 0   | 0     | 3   |
| 義經記     | 0     | 2   | 1     | 1   | 0     | 16  |
| 天草版平家物語 | 4     | 8   | 9     | 5   | 0     | 0   |
| 愚管抄     | 0     | 0   | 1     | 0   | 0     | 0   |
| 宇治拾遺物語  | 0     | 0   | 10    | 1   | 0     | 2   |
| 古今著聞集   | 0     | 0   | 4     | 0   | 0     | 2   |
| 御伽草子    | 1     | 2   | 2     | 4   | 0     | 1   |
| 虎明本狂言集  | 202   | 15  | 21    | 7   | 0     | 0   |

## 5. おわりに

中世における文末表現「と思ふ」「と存ず」について、以下のような結論が得られた。

- ・文末表現「と存ず」は、基本的には【話手<聞手】の場合に多く、その際は「候」などの敬語助動詞・補助動詞を伴うことが多い。【話手≧聞手】や公に向かったの発言などは、「候」などの敬語表現は必須ではなく、文末表現「と存ず」自体は、公的な改まり語としての性格が強いと考えられる。一方「と思ふ」は、使用者が場の上位者であるか、ある程度親密で私的な関係で用いられる表現であった。
- ・文末表現「と思ふ」は、特に同一資料内に「と存ず」の使用があれば、【話手<聞手】の場合には使われにくい。【話手<聞手】の場合には、文末表現「と存ず」を使用し、「と思ふ」と「と存ず」を使い分けていたからであると思われる。現代語においては、「と思います」の形で目上の聞手に対しても「と思う」の使用が可能であるのに比べ、中世語においてはその使用範囲が狭いが、現代語では文末表現「と存ず」が特に配慮が求められる場面以外では使用され難くなっているため、文末表現「と思う」の使用範囲が広がったとも考えられる。
- ・文末表現「と思ふ」の前接成分は願望・意志に偏っており、主観明示の定型的表現である。「と存ず」については「意志・願望」「その他」両方の用例が見られ、同一資料においても併用されている。「と存ず」は、文末思考動詞によるモダリティ表現の体系の中で、「と思ふ」が表す主観明示の側面と、「とおぼゆ」が表す不確実表示の側面の両方を担い、敬語性を持つ表現として機能していたと考えられる。

本稿では、「と思う」を中心とした文末思考動詞によるモダリティ表現の全体像の一端を示した。今回得られた結果に関しては、時代による変化や、文体的な要因についても考える必要がある。今後は「とおぼゆ」を含め、他の思考動詞や助動詞との関係について十分な検討を加えたい。

### 【参考文献】

- 穂田定樹(1958)「中世の敬語法―狂言の『申す』『いたす』『存ずる』など―」『国語国文』27-11
- 穂田定樹(1975)『「存ず」について』『大谷女子大学紀要』9
- 菊地康人(1994)『敬語』角川書店
- 辻村敏樹(1968)『敬語の史的研究』東京堂出版
- 西田直敏(1974)「平家物語の敬語」林四郎他編『中世の敬語』明治書院
- 西田直敏(1987)『敬語』東京堂出版

- 西田直敏(1990)『平家物語の国語学的研究』和泉書院
- 仁田義雄(1991)『日本語のモダリティと人称』ひつじ書房
- 森山卓郎(1992)「文末思考動詞『思う』をめぐって一文の意味としての主観性・客観性」『日本語学』11
- 森山由紀子(2003)「謙譲語から見た敬語史、丁寧語から見た敬語史—『尊者定位』から『自己低位』へ—」北原保雄監修・菊地康人編『朝倉日本語講座 8 敬語』朝倉書店
- 渡辺由貴(2007)『「と思う」による文末表現の展開』『早稲田日本語研究』16
- 【資料】※ ( ) 内は資料の成立時期を表す。
- 日国オンライン <http://www.japanknowledge.com/stdsearch/displaymain>
- J. ロドリゲス著 土井忠生訳注『日本大文典』(1604) 1955 三省堂
- 平家物語(13C 前)●覚一本:『新日本古典文学大系 平家物語上・下』1991・1993 岩波書店 近藤政美他編『平家物語<高野本>語彙用例総索引 自立語篇上・中』1996 勉誠社●百二十句本:『新潮日本古典集成 平家物語上・中・下』1979・1980・1981 新潮社●延慶本:北原保雄他編『延慶本平家物語索引篇上』1996 勉誠社 北原保雄他編『延慶本平家物語本文篇上・下』1990 勉誠社
- 保元物語(13C 前)●半井本:『新日本古典文学大系 保元物語 平治物語 承久記』1992 岩波書店 ●金刀本系:『日本古典文学大系 31 保元物語・平治物語』1961 岩波書店
- 平治物語(13C 前)●陽明・学習院本:『新日本古典文学大系 保元物語 平治物語 承久記』●半井本:坂詰力治他編『半井本平治物語本文および語彙索引』1997 武蔵野書院●金刀本系:『日本古典文学大系 31 保元物語・平治物語』
- 太平記(14C 後)●神宮徴古館本:長谷川端他編『神宮徴古館本 太平記』1994 和泉書院 ●天正本:『新編日本古典文学全集太平記 1~4』1994・1996・1997・1998 小学館●流布本系:『日本古典文学大系 34・35 太平記一・二』1960・1961 岩波書店 『日本古典文学大系 36 太平記三』1962 岩波書店
- 『日本古典文学大系 88 曾我物語』(南北朝頃)1966 岩波書店
- 『日本古典文学大系 37 義経記』(室町時代)1959 岩波書店
- 『日本古典文学大系 27 宇治拾遺物語』(13C 前)1960 岩波書店
- 『日本古典文学大系 84 古今著聞集』(1254)1966 岩波書店
- 『日本古典文学大系 38 御伽草子』(室町末)1958 岩波書店
- ※日本古典文学大系は、用例検索の際に日本古典文学大系データベースを使用 近藤政美他編『天草版平家物語語彙用例総索引(1)』(1592)1999 勉誠出版
- 池田廣司・北原保雄『大蔵虎明本狂言集の研究 本文篇上・中』(1642)1972・1973 表現社(※話手・聞手の明確でない下巻は今回は考察対象外とした)